

# かささぎ

通信 第84号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2019年 9月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇一九年七月の「森三郎の作品を読む会」では「森三郎童話選集夜長物語」(1996年、刈谷市教育委員会)所収の「けんかの後」「弟」を読みました。

「けんかの後」は『赤い鳥』一九三三年四月号に水野由之義で発表された童話です。小学校四年生の研吉と仲良しの昌二さんの話です。カナリヤを買うことになった昌二さんの話がきっかけでけんか別れて、その後のさびしい気持、明日はあやまろうと思うものさきかけが無く、なかなか言い出せない葛藤など、子供の気持ちがよく出てくる作品です。

『赤い鳥』の同じ号には、「雪」も載っています。六年生の弘の、母親に対する反抗と、後悔の気持ちが一日の流れの中で表されていました。その号の「講話通信」欄には、森君の「雪」や水野君の「けんかの後」のごとき、すぐれた現実的作篇を得ましたので喜んでをります。という、鈴木三重吉の評が載っています。

「弟」(小松淑郎)は『赤い鳥』一九三四年十一月月号掲載作品です。

これは五年生の浩吉と三年生の弟の話です。ふとしたことから弟が急な病で亡くなってしまいました。浩吉はことによったら自分と弟が逆の立場になっていたかもしれないと、複雑な思いにとらわれます。

「けんかの後」・「弟」どちらの作品も自分のことを考えるとき、相手の立場や気持ちを考えていて、読者の子どもたちの心に訴えるものがあるだろうと思います。

これらの作品を「森三郎の作品を読む会」で取り上げるのは二回目ですが、大人の私たちも読む度に、いろいろな角度からの感想が出てくることを実感しています。

「作品を読む会」で以前に読んだ作品についても、後から別の視点に気づくことがよくあります。「おばあさんと鬼」(『赤い鳥』一九三一年七月号)が、ラフカディオ・ハーンの『The Old Woman Who Lost Her Dumpling』の再話であろうということは分かっています(『かささぎ通信』第75号)。ところが「おばあさんと鬼」によく似た「おにとあんころもち」(福音館書店『子どものとも』二〇一七年一月)という西三河の昔話があるという報告が会員の河橋さんからありました。あんころ餅を落とした太郎が、追っかけて穴の中の鬼のすみかに行き、わずかな餅やあんが、すりこぎをぐるぐる回すとすりばちいっぱいになる様子を見ます。鬼のすりこぎを持って逃げる太郎が、すりこぎをぐるぐる回して川の水を増やし、難を逃れる話です。鬼のしゃくしとすりこぎの違いはありますが、効能は同じです。「おにとあんころもち」は「鬼の子小綱」の類話です。元になる話は『西三河の昔話』(三弥井書店、一九八一年)の中にあり、その著者は刈谷市にある愛知教育大学の当時助教教授だった山本節先生と卒業生であることにも不思議な縁を感じます。

もう一つ、森三郎の「目ぐすり」(『赤い鳥』一九三三年三月号)の中に、母親(狐)が「目をわずらっていると見えて、赤いもみのきれで、両目をおさえ〜しています」という場面があります。森三郎童話紙芝居第一作「目ぐすり」の制作時、画家の近藤正治さんに「もみ(紅絹)の色について皆で注文を出し、何度も書き直してもらった箇所です。この「紅絹」について寺田寅彦が『夏目漱石一』(岩波書店、一九五三年)の中で「高等学校当時漱石は、眼が悪いといつて紅絹の片れを持つてゐた。それを胸のポケットから少し喰み出させて、人がからかふと、江戸ぢや眼やみ男に風邪ひき女と言つて、いきなものにしてあるんだと答へてゐたのださうである」(一八四頁)と書いています。母狐が「紅絹」で目を押さえる場面は大事な場面だったのだと再認識しました。

次回「森三郎の作品を読む会」 十月十一日(金)午後一時半~三時半  
「鐘」「複の僧正」(『森三郎童話選集 夜長物語』所収)